

チェンマイ大学での貢献 (54)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

少数民族 La Hu 族が住むファン地区は果物の「みかん」の生産でも有名である。この地を初めて訪れたのは7～8年も前にもなろうか。当初は学校建設の調査で、その時の工学部長と一緒に土木関係の教員スタッフと共に訪れたのが記憶に残る。本件に関しては本シリーズでも紹介したと記憶するが……。その後もことある度に数回訪れているが、今回はタイ王室のメンバーが視察に訪れるとの情報が入り、急遽馳せ参じてお出迎えするという事になった。本シリーズでも幾度かこの村の学校建設については記したが、立て替え前の校舎は木造で柱の基礎となる部分は石油缶にコンクリートを詰めた物で成り立っていた。タイの工学関係委員会の長にあった学部長が「調査に行くから同行せよ」との旗振りで現地を訪れ計画に沿った図面を起こすための測量、工事費の見積もりを終え、日系企業に新校舎建設への協力を要請して実現した。初期の段階では現地に入る迄の道路も未舗装で少し雨が降るとぬかるみ、4輪駆動車もスリップし、乾くと砂埃で走行すら難事であった。支援いただいた日系企業には感謝の気持ちで一杯である。

国王がはじめてこの地を訪れた時はケシの栽培で住民は生計を立てていたと言う。これではと言うことで王立プロジェクトを立ち上げ、支援が続いたが急速な進展は無かった。ケシに替わる農作物の栽培、村のインフラ整備など多くの課題があった。今では学校が新築されたことで住民はもとより子供達の喜びに溢れた顔を忘れることは出来ない。記憶が定かでは無いが、確か 200 万バーツ余の予算であったかと記憶する。今では民族衣装をまとった住民が日毎に成長する子供達の顔を肌で感じつつ和やかな生活を送っている。村の特産としてのお茶やハーブ製品、ブランドとして売り出した飲料水などが安定した売り上げを維持しつつ確実に成長している状況を確認出来る。年明け早々の大学の卒業・修了式のことなので修了者の中の一人の祝賀会を終えてからの現地入りと言うことで夜の 9 時過ぎにパーティ会場を後にし、3 時間かけて真夜中に現地に近いホテルに投宿、翌朝早く村に向かう。途中の道路のあちこちでセキュリティ(Security)を確保するために多くの警察車両が止まっていた。現地の村に到着したのは午前 9 時半頃かと記憶する。ラマ 10 世の長女で Princess Pacharap, shortly called Ong Pa 王女様の到着まで待つこと 2 時間、村の住民やチェンマイ知事、行政関係者など次々に車が到着し準備が進められる。公式の制服に身を固め帽子をかぶりサングラスをされていたため気付かなかったが、チェンマイ県知事も到着されたと聞き出向いた。知事とは京都府とチェンマイ県との交流協定で京都まで同行したし、帰国後もチェンマイ大学農学部での農業収穫祭でも顔を合わせたので熟知の仲であった。出向くと顔を見るなり「何度も会いますね」と気楽に手を出し握手を求めて来られた。この村には今でも日系企業からプロジェクト支援の資金援助を頂いており、この地のみな

らずチェンライ県でのプロジェクトでもお世話になっている。なぜ筆者がこの事業に含まれているのかと言う背景は以下のものである。すなわち学校建設におけるわずかな協力（申請書の日本語訳の作成、その他諸々など）がきっかけであるが、本質は他にあった。森林の樹木を焼き払って農地にするとか、焼却後の山地にキノコを栽培することで収入を増やすなどの目的でなされる山林焼却から出る煙害(Haze)が特に近年問題になり、人間の健康、特に呼吸器系への影響、さらにはチェンマイを含む北部タイの目玉産業である観光産業においてもバスが煙によるスモッグで交通障害をおこすなど、その対策が急務になってきている。筆者はこの対策には「一切の焼却を禁じること」が大切で、何とか農家に焼却を思いとどまらせ、キノコに替わる換金作物の推奨と農家が焼却を考えて居た樹木や下草を焼却させずに利用し、新しい産物を開発してはどうかと提案をしたのが10年も前のことで殆ど耳を傾ける人は少なかった。行政も生じている煙害の対策への対症療法的な対応に躍起で根本的な対策は何一つ無かった。その様な状況下で定年退職したチェンマイ大学野工学部教員の一人が積極的に筆者のこのアイデアに注目して始めたプロジェクトが現在に至っていると言うのである。その教員からはいつも「貴方のアイデアが私を動かした、感謝している」と言われ「本当に良かった」といつもながら心に入れて暖めている。支援頂いている日系企業にはあらためて深謝の意を表したい。

予定の午前11時になり王女が到着され、全員一同が直立不動、政府関係者は敬礼でお迎えした。王女はかぶった運動帽子の後ろからポニーテールの髪を覗かせ、赤系統のピンクの半袖Tシャツにジーンズ、スニーカーというカジュアルな姿で村の代表の案内で村の特産物展示部屋に入り説明を聞き、写真を撮って次の工程に移動する。学校建設に寄与したと言う事で筆者を含むチェンマイ大学の参加者3名はいつでも説明が出来る体勢を強いていた。学校は村の小高いところにあり村の入り口からはいくつもの階段を上らなければならない。王女は子供達の興じるゲームに加わり、機嫌良く言葉を交わし質問をされていたようである。一般人にはカメラも携帯電話もスイッチオフとの通達があり残念ながら写真は一枚も手元にない。校舎に入る手前の建物で子供達とのゲームに参加の後は、山の頂き近くにある各種施設を視た後に校舎の視察となった。われわれも整列してお迎えしたが、王女は教室に入り子供達と歓談され、しばらくして出てこられた。高所に位置する校舎からの村につながる山々を眺望された後、お付きの方がチェンマイ大学からの参席者である事を告げると王女は学校建設に協力した当時の工学部長に近づきお話をされた。かつての工学部長も当時のいきさつや現在もプロジェクトが継続していること等を手短に1、2分ほど話されて行事参加の大役は終わった。後ろ姿をお見送りしつつ、王女が完全に現地を立たれるのを確認して大学への帰途に付いた。子供達の楽しそうな顔、村人の素朴で素直な振る舞い、特産物を作り上げ、生活の安定を築きつつある村の益々の発展を願わずには折れない。将来に向けてこの地から多くの人材が生まれることを信じて疑わない。これが貢献と言えるかどうかは他人の評価が決めることである。「心から尽くして、なおかつ嬉しい、よくやった」という思いを実感するのは何とすばらしいことかと自分勝手な思いに浸っている。コミュニテ

イベースの農村開発プロジェクト(Community based Rural Development)の典型的なモデルとなり得ると確信する。特にここまで支援を継続し貴重な発展を成し遂げる事が出来た背景には多大の支援と協力を頂いた日系企業の存在を語らずにはおられない。この紙面であらためて深謝の意を表したい。余談であるがこの視察イベントで名刺交換した男性は Hydro and Agro Informatics Institute のアドバイザー (Advisor) と聞いたが驚いたことに筆者の母校である三重大学に姪が留学しているという。懐かしさも手伝い正直嬉しかった。



Fig. 1 村の特産物の展示(お茶、飲料水とハーブ製品)



Fig. 2 地元特産飲料水のボトル詰め



Fig. 3 チェンマイ県知事(中央)と談笑する元チェンマイ大工学部長 (右の黒スーツ)



Fig. 4 王女を迎える準備が進行中の村の入り口と交通警備の役人 (右上が校舎)